バディもの（習作２）

菜乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バディもの（習作２）

【Ｎコード】

Ｎ４３８１Ｗ

【作者名】

菜乃

【あらすじ】

習作１の少し後です。

この部屋が海に包まれるのには、とあるリズムが存在するらしい。
何度か、私に甘えるホログラムのジュゴンや鯨をみて、一定の時間経過ではないことは解った。
寒々しいこの部屋がなぜ、寒々しいのか。
故郷から連れてきたネコが死んで以来、動物を飼えない玖摩利が、遠い海洋の一角で水棲ほ乳類を飼育しているなんて。
それは、大事なものは私だけだ、他には要らないから側に置かないと、言って憚らない彼らしい行動だった。

私は電子の粒で餌をあげ、なんとなく温かいだけで自分の身体をすり抜けていく小型の鯨を、
きゅーん…と切ない声で啼く彼らの動作と、ゆらゆらゆれる光線をみて、
ときどき自分が空っぽになるのを感じていた。

きっと彼は、ときどきこんなふうに、空っぽになるためにこの部屋に戻って来ていたんだろう。
玖摩利に帰る所はない。
惑星・聖シアを統べる王であり生神であるユリオンの近衛、羽柴家。
その現在の主座、羽柴玖砂の弟でありながら、私に全てを賭けて、シアの戸籍を抹消された彼は、もう、シヴァの下で生きていく以外に、まっとうに生きる道はない。
元々彼は、まっとうな生き方なんて望んでないし、羽柴の一族に名を連ねていたところで、玖砂ねえちゃんの近衛やら、沙羅の近衛やらで、相当な危ない橋を渡らせられることは覚悟していた筈。
まだ私が学生士官で、玖摩利が１０代もはじめの少年の頃、私に

とって痛くて怖い訓練を、彼はすべてこなした後だったっけ。
それでも、人生を預けた私という存在が、古い呪いに捕われて消えたら、一体彼はどうするんだろう。
いっそ私の呪いで、先に彼を死なせる方が、幸せだと思うんだろうか？
どうして彼は私から逃げないんだろう。桂樹のように。
桂樹は私を解放したのかしら。
それとも私から逃げたのかしら？

ふっ、と、柔らかな青いゆらぎが消える。私たちは、淡い日差しが入る薄暗い部屋に戻ってくる。
くりっと頭だけを回転させて、枕を抱きしめてうつぶせになっている玖摩利の顔を覗き込む。
細い一重の目に、長い睫。なんとまあお前はゲリラ戦の教官もだろう、と、横から正掌を叩き込みたくなるくらい安らかに眠っている。
やっぱりあの海は、玖摩利の脳波と同調しているんだ。
枕を抱く肩から肩甲骨にかけて、美しい筋肉の上の皮膚には、長い年月をかけても消えない傷痕が刺青のように残っている。
あ、これは休暇を許したら拷問をうけて帰って来た時の。
こっちは私をかばって、骨ごと吹っ飛んだとき継いだ痕。
ぺと。
日焼けした背中に人差し指で触れてみる。当たり前だが温かかった。
当たり前だけど。。
彼は人間で、
体温も血流も、正常なのだ。

あったばかりのころは、生意気なだけのガキかと思っていたけれど、気がつけば身長は私のそれを越し、声が変わり、すっかり男の

人になってしまった。
…私の細胞はエラーを出さない。
ほとんどゆらぎなく、尋常でないくらいに遅く、細胞は死んで再生する。
医者のみたてでは、半永久的に、なんらかのかたちで生命活動ができる肉体なのらしい。
それをもっと早くしっていれば、ラケルは死ななくて済んだ。
狭いコックピットに１０年以上閉じ込められて、全ての生命維持エネルギーを私の方へ回して、あんな真っ暗な宇宙の片隅で白骨になるまで私の無事を祈り続けなくても良かった。
急普請で情緒が欠落したラケルから、クロエが最後に受け取った通信は、錯乱気味だったとこっそり聞いた。
「マスターどうか生きていて
マスターどうか生きていて
マスターどうか生きていて
マスターどうか生きていて
マスターどうか生きていて
かみさまがもしいるのなら，ＲＡＣＨＥＬ，のすべてをさしあげます
マスター死んではいやです死んではいやです死んではいやです
，ＣＨＬＯＥ，、マスターから返答無し救助を求む
壊れても治せないのはいやです」

私は死なないのに。
何故ならそれが、私にかかった呪いだから。

あの子は死と言う概念さえ知らずに、輸送船のメンテナンスベッドの中で目覚めた。
ドールを操る事ができないという重大な欠点をもった魔法使い・クロエを補う、私の２体目のフィーレだった。
『青龍』が自害した時、私と一緒に宇宙に放りだされてから、

『死とは壊れても治せないこと』だと、彼女は学んでしまったのだろう。
あんな暗闇で、たったひとりで。
私の存在が『何であるか』を、たったひとことの単語であるそれを、もっと前にシヴァや沙羅が私に教えてくれてさえいたら。
私が錯乱しようと、逃げ出そうと、肉体を破壊しようと！
そうしたら、死ななくても良い命がたくさんあった。

「だからもう死なせない。この呪いの餌食にさせない。」
手首の端末を壁に沿わせ、空間に時刻表を表示させる。
そろそろ家をでれば、始発に間に合うだろう。

私は玖摩利のくせのある髪をわしゃわしゃ撫でて、立ち上がる。
ああ、私、こんなことばっかしてるなーーー。
早朝こっそり家出同然、なんて、何回目だろう？
不覚にも顔が笑ってしまう。
過去の家出（城出？）のとき、何故だか常に、玖摩利のお見送りがついていた。

そのとき。
ドアの鍵を開けようと、端末認識しようとしたそのとき。
切ない遠い残響が、部屋中に広がり、目の前は美しい青に満ちた。
「お前、得意だなー。早朝家出。」
振り返ると、玖摩利があくびをかみ殺しながら、布団の中で伸びをしていた。
「ははっ。。」
笑う。いやだなあ、顔が勝手に笑う。
布団の甲羅から出てくる気配なく、変わらず左腕は枕を抱えたまま、玖摩利は右手で小さくおいでおいでをした。
近づこうとすると、遠い海の生物たちが、呼ばれたと思い私と一

緒に彼に群がる。
「ちょ、おまえらはいいの。あとであとで。MだM。」
「はいはい。」
その手に招かれるままに彼にどんどん近づく。ずんずん近づく。
彼の手が私の後ろ頭を撫で、彼は少し首を伸ばす。
それから彼は、私の首に腕を回して、ああよしよし、と宥めるように言うと、額をごちんとぶつけて来た。
「痛いよ。」
「おうよ。お前は何回いっても早朝に黙って家出っつーのをやめねえのな。」
こっそり行くんだったら、人の頭わしゃわしゃするんじゃねえよ。
「ははは。」
さっき見た綺麗な肩の筋肉に、額をのせて笑ってみた。
いま顔をあげると、泣き顔を見られるに違いない。
この肩は私の涙をなんびゃっかいも吸っているから、いまさら隠すべくもない。
「いやー。ほんとはね…」
「あん?」
「ほんとは、見送ってほしかったんだ。」
「おう、そうだろうよ。」

始発には間に合いそうもなかった。
次初にのるべく私は小走りになった。
彼は、ジュゴンだかマナティだかイルカだかオットセイだか魚だか、
とにかくそんな奇妙なマスコットを、家を出る際私に投げて寄越した。
「なにこれ?」
「『発見!珍獣水棲ほ乳類、M!』迷子札」
「迷子札ぁ?ふ、札じゃないし。。」

「使い方は想像の通りだ。」
「いやまだなにも想像してないけど」
「じゃあ使い方はまかせる」
「いや任せられても」
おそらく発信機とか、そういう部類だろう。ふん、さすが長い付き合いだけあって、私が生体に埋め込まれてる発信器はオフにすることや、パストナシェルや「夢魔」のレーダーを破壊する事はお見通しだ。船の中で分析してみよう。
彼は外まで送ると言って聞かなかったが、里心がつくので止めておいた。
最後の最後まで、彼は私の意志を尊重してくれたことに、感謝する。
私が「サーカス軍」を離れて。シヴァの下を、レイムバラダを捨てて、只の人になって、玖摩利と会えるのはこれが最後かもしれなかった。
でも、彼は最後まで、「好きにしろよ」といって笑っていた。
ばーか。ばかばか。あとから絶対苦しむくせに、マゾー。

それが。私の意志を尊重するということが、
二人で決めた約束であり、お互いが後悔を残さない最良策であることを、
もうふたりとも、十分知っているけど。
嬉しくて、そんな彼に、顔はずーっとにやけているのに。
涙もとまらず零れ続けて、駅に向かう間中、私の顔はくしゃくしゃだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4381w/

バディもの（習作２）

2011年9月5日03時26分発行